

チヨウ・ピンピン『チベット高原に花咲く糞文化』

■出版地：横浜 ■出版社：春風社 ■出版年：2023年 ■総頁数：262頁 ■定価：3,300円＋税

堀田 あゆみ*

本書は、「ヤクの糞こそが、通時代的にチベット文化を構築してきた、最も重要な生態的・文化的資源であること」(p.4)を、フィールドワークによって収集した詳細なデータに基づいて描き出した民族誌である。「はじめに」で著者が述べているように、森林限界よりも標高が高く、寒冷で乾燥した環境において人類の生存を考えるうえで、動物の生態資源としての有用性は論をまたない。これまで生態資源としての毛皮や乳、肉の利用に関する研究は多くなされてきたが、本書の特徴は人々の牛糞利用に焦点をあて、生態資源と文化資源という2つの側面から分析を試みた点である。本書は「はじめに」に続く8つの章と巻末資料で構成されており、各章の概要は以下のとおりである。

第1章「チベット高原における人類の適応およびヒトと動物の関係」では、チベット高原に移り住んだ人類が、野生動物の狩猟採集から家畜化を経て農耕牧畜に至るまで、動物の利用によって高地適応してきたことが考古学および人類学の先行研究を基にまとめられている。チベットの主な家畜はヤギ、ヒツジ、ヤクであり、その乳、肉、皮、毛が暮らしに利用されてきたことは多くの研究者によって記録されている。しかしながら、資源の乏しい高地寒冷地域での生存に必要な不可欠な燃料である、糞の利用およびその重要性については看過されてきたとする。糞の利用こそが高地適応を可能にしたと主張する著者は、ヤクの糞を最重要の生態資源と捉えると同時に、文化における象徴資源としてその意味世界を探ろうとする。

第2章「調査概要」では、2000年ごろから著者が約20ヶ月かけて調査を行った4地域の概要と生活の様子、ヤクの糞(以下、牛糞)の利用状況について述べられる。地理的条件や資源状況の異なる4つの場所というのは、乾燥高冷地A、肥沃牧草地B、都市近郊

農村C、近代都市Dである。それぞれの地域に暮らす世帯の家族構成から1日の流れ、家畜構成や季節ごとの放牧方式、年収の内訳に至るまで丁寧に記述することで、地理的条件や資源状況の違いが浮き彫りにされる。また、本書の主役であり、季節、牧草、年齢、性別、体調などによって色や形状およびその呼称が変化するという牛糞の特徴が写真つきで読者に共有される。天然牛糞と加工牛糞の違いや牛糞の加工方法、それらを燃料とする牛糞炉の解説を通して、日々の暮らしにおける牛糞の中心的位置づけが明示される。

第3章「燃料としての利用」では、調査地それぞれの気候や地理的条件とそれに規定される燃料資源の種類、燃料となる糞の収集方法、季節や糞の乾燥状態に応じた加工と保存の方法が詳しく述べられる。著者によれば加工牛糞は形によって「ジョテープ」(円盤形)、「ジョリエリエ」(球形)など、それぞれに異なる名称と特徴(着火の難易度、燃焼時間の長短など)があるという。調査地A、B、Cでは、収集時の条件と使用目的に応じた牛糞の加工および使い分けが行われている。他方、電気・ガス・水道などのインフラが整備された近代都市Dでは、炊事用燃料としてではなく寒期の暖房用に牛糞が好んで使用されている。しかし、その牛糞を自家調達する術がないため購入によって入手することとなり、新たな牛糞ビジネスが誕生しているという。

つづく第4章「牛糞の素材としての利用」では、燃料需要を上回る牛糞が入手可能な調査地BとCの事例として、牛糞やその灰の多様な活用例が紹介される。まずは建築資材としての利用であり、凍った糞をレンガとして、新鮮な糞をセメントとして代用することで、食肉貯蔵庫、お年寄りや子どもが寝起きする越冬用仮小屋、イヌ小屋、子ヒツジ用の小屋、家畜用防風壁な

* 立命館大学

どがコストをかけずにつくられている。そして、牛糞燃料から出る大量の灰は、人や家畜の糞として利用されるほか、余熱調理に使用されたり、吸水性を活かして生理用品やおむつとして利用されたり、殺虫、殺菌、断熱、地面の凍結防止、消臭など、さまざまな効果を期待され多様な場面で使用されていることが述べられる。

第5章「牛糞の象徴的な利用」では、何らかの形で牛糞を用いた儀礼や儀式、慣習の事例が紹介される。冠婚葬祭や日常生活において大事なことを始める際には、煙を神への捧げものとし不浄を払うための「サンを焚く」行為が行われる。牛糞は香木を燃やすためだけでなく、牛糞を燃やすこと自体が縁起の良い行いとされているという。「サンを焚く」のような、どの調査地にも共通の実践が見られる一方で、引っ越しや飲食店の開店に際し、新しい牛糞炉の火入れ儀礼や入口に牛糞を飾るといった実践が、近代都市Dや都市近郊農村Cで観察されている。また近代都市Dとその周辺では、2000年ごろから始まったという進学祝いの宴会において「サンを焚く」、牛糞を飾るといったことが行われているほか、赤熱した牛糞と塩を用いた病気の治療が一般家庭で行われている様子も観察されている。

第6章「分析」では、牧畜を行う3つの調査地の牛糞利用の比較、牛糞の燃料としての特性、牛糞の象徴性についての議論が展開される。まず牧畜を行う3つの調査地A、B、Cの比較では、著者の収集した詳細な記録に基づいて、生態的・経済的な条件がそれぞれの牛糞の収集方法、加工・保存方法、使用量の違いを生み出していることが指摘される。また、著者は牛糞炉を使用した牛糞の燃焼効率実験によって、牛糞が石炭とほぼ同等の能力を持つことを証明し、家畜から無償で得られる牛糞の燃料としての有用性と人々が牛糞を利用する合理性を強調する。

入手可能な牛糞の量や利用方法には地域差が見られることから、牛糞の象徴的な意味づけにも地域差を考慮する必要があると述べたうえで、調査地CとDにおける結婚式と出産の事例を取り上げ、牛糞が富と命の象徴であることが提示される。他方、遊牧を行う調査地A、Bでは、縁起を担いで牛糞を飾る習慣や牛糞や乳を引き継ぐ儀礼などは見られない。したがって、牛糞に対して象徴資源としての価値を見出しているのは、牧畜から離れ牛糞を手に入れる機会がほとんど失われている近代都市DとDに牛糞を供給している都市

近郊農村Cであるとする。半農半牧を営む都市近郊農村Cは、都市部からの影響によって生活から牛糞が失われていく状況下であり、牛糞の象徴資源への価値転換や儀礼的な活用に熱心であるという。それは牛糞が換金物として収入の大きな割合を占めていることと無関係ではない。さらに著者は、近代都市Dにおいて牛糞は、富と命というかつての象徴的意味に加えて、チベット人のアイデンティティとしての象徴的意味も持つようになったと指摘している (p. 183)。

第7章「考察」では、チベット高原に移り住んだ人類と牛糞との関係を4段階の時系列で捉え、各段階に4つの調査地をそれぞれモデルとして対応させることを試みている。第1段階「チベット高原での人類の適応」は標高の高さによる低酸素、低温環境に適応するために人類がヤクの糞に着目し、馴化された野生ヤクに接近して生活している段階である。これに対応するのが乾燥高冷地Aであり、牛糞は生態資源としての側面が強いとする。第2段階「ヤクの家畜化」は、人類がヤクの家畜化に成功し安定的に牛糞を得た段階である。牛糞に対する知識の深化や加工技術の発展によって生態資源としての牛糞が最大限に活用されている段階であり、肥沃牧草地Bがこれに対応する。第3段階「交易の対象としての牛糞」は、生態資源が交易の対象となり、牛糞の換金物としての利用が見られる段階である。牧畜生活と都市生活の狭間期であり生態資源としての価値は失われていないものの、象徴資源としての意義が強調される。これに対応するのが都市近郊農村Cである。第4段階「都市化による影響」は、人々が牧畜生活を離れ、牛糞が購入物となった段階であり、近代都市Dに対応する。牛糞に対する知識や技術が失われてしまう一方で、富や命、牧畜民としてのルーツなど実用から離れた象徴資源として新たな意味づけがなされ、その価値が高められていると分析する。

第8章「結論」では、チベット高原を舞台に、エネルギーの確保が生存の必要条件である人類が、糞の利用によって高冷地適応を可能にしたという著者の主張が述べられる。人類がチベット高原に暮らすには、低酸素と低温環境という2つの障壁があった。低酸素環境については、チベット人がデニソワ人から受け継いだ低酸素適応遺伝子EPAS1によって克服され、低温環境には動物の糞をエネルギー源とすることで適応したという。

人類と動物の関係に関するこれまでの先行研究では、家畜化の目的を肉や乳製品あるいは使役のためと

位置づけてきたが、各調査地において人々が恒常的な牛糞の入手に腐心し、常に牛糞が関心の対象となっている実態を通して、「チベット高原で牧畜生活を行う人々にとっては、燃料としての牛糞の利用が水や食糧以上に重要な目的であること」(p. 200)を明らかにしたのが本書である。燃料としての牛糞の有無が人類の生死を左右していたからこそ、生態資源としての役割を終えた地域においても、命や吉祥の象徴として神聖視されつづけているのだと著者は説明する。過去、現在、未来においてもエネルギーの確保は人類生存の鍵であり、その燃料を生み出す動物と共に生きる術を獲得したチベットの人々から、われわれ人類は環境の変化に適応するヒントを得られるのではないかと結ぶ。

巻末には補足資料として、本書で述べられたチベット人の暮らしや儀礼に関わる、宗教や食物、家畜ヤクの交配方法、結婚式の費用や葬式の手順・方法の詳細が記載されており、読者の理解を助けている。また、本書に登場したチベット語の用語集も付属しており、五十音順で用語のカタカナ転写、チベット文字、ワイリー式転写、意味を確認することができる。

本書の魅力はタイトルもさることながら、牛糞への著者の熱い思いが伝わってくるところである。フィールドワークによる現地での生活を通して、牛糞を収集する苦労や牛糞の不足する不安を経験した著者だからこそ、人類にとっての牛糞の真価に気づき、ここまで追究することができたのである。これまで等閑視されてきた燃料資源としての牛糞に脚光を浴びせ再考を迫る良著である。

ただ、著者の分析に関していくつか気になる点があったので以下に述べる。まず、第7章「考察」において、チベット高原の人々の牛糞との関係を歴史的に4段階に分け、各段階に4つの調査地域それぞれをモデルとして対応させようとする議論に強引な印象を受けた。人類と牛糞の歴史という大きな括りで捉えようとするあまり、各地域や世帯の置かれた異なる状況や家畜の経営戦略などが無視されている点、人類と牛糞の関係が生態資源から文化資源へと単線的に変遷するものとして描かれている点に疑問を抱いた。

例えば、乾燥高冷地Aとの対応を見てみると、資源の乏しい高原に人類が適応し始め、野生ヤクに接近して燃料である糞を得ている第1段階であると位置づけている。そしてA地域の主な調査世帯G家には6頭しかヤクがおらず、係留も搾乳もしない粗放的な放牧が行われており、放牧地に落ちている糞を集めて燃料と

する形での関係であるとされる。

しかし、A地域の牧畜世帯における平均ヤク頭数は6.6頭、平均ヤギ・ヒツジ頭数は104頭であるが、G家の場合は6頭のヤクと平均より多い約170頭のヤギ・ヒツジを所有している。羊毛とカシミヤヤギの毛の生産が主な収入源であると述べられていることから、G家の牧畜経営の中心に置かれているのはヤクではないということが明らかである。降水量が極端に少なく乾燥している植生や搾乳をしないという状況を考慮すれば、係留をせず月に1回家の側をヤクが通る程度の接点しかないという粗放的な放牧であることも合点がゆく。本書は一貫してヤクの糞に焦点を絞っているため、人々とヤクの関係性、ヤクの糞利用への言及に終始しがちであるが、暮らしを多角的に捉え全体像を俯瞰したうえで、その全体の中におけるヤクおよび牛糞の位置づけや比重を探る視野が必要であろう。

また、第6章「分析」において、牛糞の象徴資源としての利用に関し、近代都市Dや都市近郊農村Cで観察されたような、結婚式で牛糞を飾る習慣、牛糞や乳を引き継ぐ儀式、引っ越しの際の牛糞炉への火入れ儀礼などが乾燥高冷地Aと肥沃牧草地Bでは見られないとし、その理由を以下のように分析している。乾燥高冷地Aでは「資源が乏しく、燃料は常に逼迫しており、儀礼に使用するほどの余裕がない」ため、「牛糞はすべて生態資源として利用され」という(p. 183)。他方、生態資源としての牛糞利用が最も多様な肥沃牧草地Bでは、「生態資源としての日常性が、かえって象徴資源としての利用の機会を減らしている」(p. 184)と説明する。しかしながら、著者が引用している通り、「生態物に何らかの社会的意味が付与されること」(印東(編)2007: 14)を生態物の象徴化と捉えるならば、両地域においても「サンを焚く」という必要十分な儀礼行為が行われる事実を鑑みるに、すべての調査地において牛糞の象徴的利用が行われていることが確認できる。

確かに著者の指摘するように、牧畜生活からの心理的・物理的距離が遠いほど生態資源の利用にくらべて象徴資源の利用が優勢になることに疑いの余地はない。しかし、説明の根拠となっている、儀礼における牛糞の登場頻度や使用される牛糞量の多寡は象徴資源としての利用の有無とは文脈の異なる話である。それにもかかわらず、「牛糞の量の多さが富の象徴となっている」(p. 180)という都市部の物質主義的な評価基準を踏襲するかのごとく、牛糞の多寡と登場頻度を象

徴資源的利用の指標として当てはめてしまっている嫌
いがある。

以上が気になった点であるが、本書の着眼点や丁寧
なフィールドワークによって詳細なデータを収集する
姿勢は、フィールドワークを行おうとするすべての読
者にとって大変示唆に富んだものである。モンゴルで
フィールドワークを行う評者にとっても、見慣れた風

景の中に文化を読み解く重要な糸口があるのではない
かという再認識を迫られた良著であった。

参照文献

印東 道子（編）

2007 『生態資源と象徴化——資源人類学07』弘文堂。